

---

# 悪魔のドルチェ

雀羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔のドルチェ

### 【Nコード】

N4655D

### 【作者名】

雀羅

### 【あらすじ】

その貴方や貴女、悪魔のドルチェと云う名の詩は如何でしょう。各種取り揃えておりますので、是非ご来店下さいませ。

## 甘い蜜

私は愛するものに依存してしまう  
そのことに、いつも困らされてきたの  
そこで私は考えた

離れられないのならば  
無理にでも  
離してしまえば良い

最初はお気に入りの本を燃やした  
：確か、小学校5年生のとき  
本が、私の大好きな本が炎の中で踊っていて  
悲しい反面、安堵感もあった

しかし、その灰に固執してしまった  
それを母親に見られてしまい  
気味悪がられ  
川にぶちまけられてしまった

そのとき私は思い付いた  
水に沈めたら、  
何も残らない

次に気に入ってしまったものは石、だった  
だから沈めた  
浮かんでこなかったから  
私は満足した

それから、色んなものを沈めてきた  
ゲーム機、携帯電話、テニスラケット、時計…

そして今、私は最後に  
二つのものを沈めてきた  
これで最後

やっと、誘惑という名の毒の抜き方を知ることができた

そろそろ、陽が上る

そこで人々は見るとしよう  
私を誘惑させ続けたものを

それは、  
貴方というモノと、  
私の肉体というモノ

\*\*\*後書き\*\*\*

ちなみに雀羅は、このようなことはしておりません。  
友人に尋ねられたので、誤解を受ける可能性があるのならば、と思  
い宣言しておきます。

まあ、この行為が悪いとは言いませんが。  
私は寧ろ、そのまま依存してしまうタイプですので正反対、と言っ  
ても差し支え無いかもしれませんね。

このような文字潰しにまでお付き合い下さった方に、感謝の念を。  
それではまた、歯車が不協和音を奏で出すまで…。

嗚呼、虚しい

嫌悪というものは  
人間に与えられた  
最も至福な感情の一つ

嫌って嫌って嫌って  
憎んで憎んで憎んで

そして終には  
嫌わずには生きていられなくなる  
憎まずには生きていられなくなる

離れられなくなるの  
嫌悪することによって生まれ出てくる蜜の味を  
覚えてしまうから

もしも、もしも本当に心から憎みたいのなら  
見なければいい

そのもの自体も、そして憎しみすらも  
消せばいい

その存在を、自身の心の中から

好きと嫌いは表裏一体  
都合のいい言葉だとおもっていたけれど、  
案外本当のことかもしれないわ

\*\*\*後書き\*\*\*

実はこの作品は、ダークな詩の書き方を忘れた雀羅のリハビリから生まれ落ちたものです。

ダークな詩の終わり方すら忘れた私は、友達に見せる際、こんなことを書いていました。

『ああああ、真つ暗な詩の書き方忘れた！

まあ、馬鹿と天才は紙一重、なんて言うし、そんなもんですよ多分。  
あれだよあれ、いやいややよも好きのうち、みたいなさ あ、帯  
くるくるくるー、ああええvvvってやつだよん！』

……へっ（遠い目）

友達に、後半部分をとてつもなく突っ込まれました。

なにそれアホじゃんアハハハハー！的な感じで。もう一人は、

「わ、わかる…よ!?」なんてフォロークれしましたが。先の友達にすべてを吹き飛ばされた感、どうしても否認できませんでした（  
再び遠い目）

か、漢和辞典…じゃない閑話休題。それではまた、歯車が壊れるまで…。

生きている

私は、生きているの？

そんな思いが毎日渦巻いている

笑っているから？

…そんなの、仮面を付けているのだから理由になんてならないわ

目を見ることが出来るから？

…私はあなたの目を見つめながらも何時も遠くを見ている気がするわ

泣くことができるから？

…そうね、心が傷つくのだもの

けれど一時期は泣くことすらできなかったわ

その時私は何だったのかしら

わからない、  
わからないわ

誰も教えてくれないの

だって誰も知らないから

私は、いろんなものを隠しすぎたのね

私はいつか、心から笑うことができるのかしら  
相手の目を見つめることができるのかしら

泣くことはできるようになったの

だから、だからきつと…。

はやく、生きていると実感したいわ

\*\*\*後書き\*\*\*

これは、雀羅の所属する放送委員会の同学年の男の子と話している  
ときにふと思ったことを、言葉にしてみた作品です。

私は極度の人見知り（恥ずかしがり屋）で、仲は良いはずのその人  
の目を見て話すことができませんでした。たとえ見たとしても、そ  
の人の目を通り越した所を見ていたり。



その人は、ちゃんと私の目を見てくれているのに。

今はもう、その人は全く怖くなんてありません。目を見て、笑うこともできます。

涙が出なかった、ということもありましたね。どれほど辛くても、泣くことができませんでした。泣いたら楽だと、わかっていたのに…。

しかし、ある日のこと。私は夜横になって、携帯を使用し小説を読んでいた。

なんとなくあった、『悲恋』というジャンルの物語。

お察しの通り、わんわん泣きました。布団を噛み締めなければ嗚咽がもれる程、数年ぶりに。

嗚呼、字数埋めとはいえ、少々後書きが長すぎたようですね。それではまた、運命と云う歯車が絡み合えば…。

受け入れて、

タツ　タツ　タツ　タツ

私は走る。闇の中を走る。まるで何かに追われているかのように走る。

嗚呼、もう辺りは真っ暗だ。こんな暗闇、見たことがない。

今日の空は、そう言われてみると確かにおかしかった。

朝は、まるで泣き出してしまいそうな雲の色だったの。鈍い、とてもなく鈍い灰色で、私は一瞬外に出るのを躊躇ったものだ。

昼は、とても明るかった。今朝の雲は何処へいったのかと不思議に思うくらい、光で満ち溢れていたわ。

もしかすると、それもおかしい空の動きの一つだったのかもしれない。

夕方、気付くと空は真っ赤に染まっでいて。太陽なんて見えないのに、雲が血に染められたように赫かった。空気も、浸透していくように赤くなってゆき、幻想的な風景になった。しかし私は、その幻想が恐ろしくて恐ろしくてたまらなかったの。

そしてその後すぐに、真っ暗になった。闇が迫ってくるような気がして、私は恐怖を覚えて走り出したのだ。

だが、走る途中で気付いた　否、気付いてしまった。空は、人間と同じなのだということに。

辛いことがあって、朝は憂鬱で。昼は皆に心配をかけまいと空元氣を出し、友達も明るくなるように暖かく接してくれる。しかし夕方になると、不安が込み上げてきて友達の存在を霞ませてしまう。そしてその辛さから血を流してしまうのだ。夜は不安に潰される。もう駄目だと思い、自分を必要以上に責めてしまう…。

そこまで考えた時、私の足は止まった。人間と同じであるならば、受け入れなければいけない。潰されてしまいそうならば、支えなければいけない。

そして振り向き、闇へと、足を進めた。

私の存在は消え、空の支えとなった。

取り、込まれた…。

前を向いて

そんなんじゃ

真実だつて見えないよ

何を言つても

コレ嫌い

アレは嫌だ

ドコがいいの

わかんないなー

そんなんじゃ

好きな物が

無くなつちゃう

好きな物を

忘れちゃう

好きな物も

嫌いって言つちゃう

あなたがそう言う隣に

ソレが好きな人が

ホラ、呟いてる

何がいけないの

好きだと言いつせず  
眉を寄せながら  
心を枯らしながら

前を向いて

コレが好き  
アレもオススメ

そんな言葉で  
毎日が幸せになる

心が潤う

だから、だからね  
嫌いなんて容易に  
言わないで

\*\*\*後書き\*\*\*

ある子を見ていて、思ったことです。  
雀羅がこんな前向きな詩を書くことは珍しいのですが、ね。

性格が酷いわけではないのですが、会話を聞いていると上記のようなネガティブな発言ばかりしているのです。少々、端から聞いていて寂しい思いをしました。

気付いたら鉛筆が動いていたというホラー（…）

まあ、雀羅自身もポジティブなわけではないですけれどね。内に溜め込むタイプなので、質は悪いかもれません。取り扱いにはご注意を！（…）

そういえば。B・Zさんの歌に、この詩の内容のような歌詞がありひどく驚きました。と同時に嬉しくもありましたけれどねうふふ  
雀羅も、前向きに生きていつてみたいものです。

このような戯れにまでお目を通していただき、ありがとうございます。  
した。

それではまた、歯車の錆が取れ出した頃にでも…。

## ソレは所謂

一歩一歩ゆっくりと、硬く脆くぼろぼろなソレを踏み締める。ソレ  
は所謂、階段と云うものらしい。

しかし何故だろう。

階段とは、上の階に行くことを明確な目的と掲げるものではなかつたのか。

少しずつでも上に近付いていると実感するためのものではなかったのか。

この階段は上に行けば行くほど、足を動かせば動かすほど、出口の無い迷宮の中を彷徨っていると感じさせるのだ。

嗚呼、此の迷宮の出口とは何処にあるのだろう。そして入口は何処にあったのだろう。

入口から離れていっているという感覚はあるというのに、出口に近付いているという気持ちにはどうしてもなれない。

唯だ、奥へ奥へと進みゆくだけなのだ。

そこに、小さな、ほんの小さな違和感。

恐怖が、慟哭が、哀しみで満ち溢れた咆哮が五感を震わせる。

ソレ 階段と云うらしい が大きく揺れ動き、片膝を付く。

だが、這って上へと向かう。

理由はない。思い付く余裕もない。

行かなければ、という本能のようなものが頭の中を占めている。  
頭蓋骨がキリキリと音を立てる。

本能に対し、思い出すなと理性が張り合い頭が締め付けられる。

行け、思い出すな、思い出せ、行くな、  
…

階段を昇り切って頂上から地上を見下ろし、そして全てを思い出した。

同時に地面へと崩れ堕ち、一筋の涙を流す。

昇っていたのは唯だの建物の唯だの階段などではなく、閉ざされた私の心の出口へと続く先の見えない螺旋階段だったのだ、と…。



## 忍び寄る手

怖くないかい？

嫌じゃないかい？

恐ろしくないかい？

近付きたくないよね

触れたくないよね

見たくないよね

じゃあ、さ

逃げようよ

辞めようよ

消えようよ

！！

そんなことやめた方がいい

そんなことをして傷付くのは君だよ

あいつらは何も傷付かない

ただ君を嘲笑うだけ

だから、そんな考えは棄てなきゃ  
君の心が棄てられる前に

だから、そんな考えは壊さなきゃ  
君の心が壊される前に

お願いだ、やめてくれ

自分の居場所を見付ける、なんて

自分の存在に気付いてもらう、なんて……

\*\*\*後書き\*\*\*

ええと、これは確か、皆が忙しくて自分に構ってくれなかった時に  
傷付いて突発的に書いた詩です。

雀羅は、こんな風にリズムや対比を作って詩を書くのが好きです。

…ただ単に、長文を書くのが苦手なだけでもあるような気がします  
が。

短い言葉に、伝えたいことを詰め込むのは楽しいです。詩は俳句と  
違い、字数が決められていませんし。

まあその御蔭で、後書きを書くのが大変なのですが。

だから、長文をストーリー性を持って書き上げられる人は尊敬しま  
す。

どの目線から書けばいいのか、よくわからないんですよー…。

『…地球破壊』の連載は、目線を入れ換えることによってどうに  
か愉しんで書いています。というか雀羅にタイトルを付ける能力を  
下さい(…)

それでは、歯車が軋み出し、動きたいと切に願い出すその日まで…。

## 愛シテル

さあ溺れさせてよ

貴方の愛で

もう何も考えられないくらい  
思考能力すらも残らないくらい  
大きな愛で私を溶かして

そしてその愛で私を殺して  
放っておいたってどうせ死ぬの  
だから、疾く疾く私を殺して  
私は貴方の愛に包まれて死にたいの

そしてもう一つの目的は  
私のことを貴方に刻み付けること  
これは貴方には教えないけれど

貴方の愛を内側から燃やして  
哀しさ、そして憎しみへと育て上げ  
私を忘れることができなくてアゲル

貴方は喜ぶに違いない  
だって私のことを忘れずにすむのだから

愛より憎の方が感情は強いでしょう？  
だから私から貴方への  
秘密のプレゼント

さあ溶かしてよ、殺してよ  
貴方の愛で、私のことを

溶かしてアゲル  
刻んでアゲル

私の不純で純粋な愛で  
貴方の優しい愛を

\*\*\*後書き\*\*\*

…あら？じゅ、純愛ラブポエムを書こうとしていた筈なのですが、  
何処でどう間違えたのでしょうか。

最初の2、3段落までは大丈夫でした。  
なのでおそらく、もう一つの目的「秘密の目的」倫理的に…な目的  
「狂愛なんていう式が成立してしまったのでしょね。」  
自分の思考に乾杯

狂愛は、書くのは大好きです。ある方に影響を受けまして。  
ただ、そんな様には絶対に愛されたくないですね。だってめんどく

さそうですもの。って、書き手がこんな事言っているのでしょうかね？

それでは、歯車が碎け壊れ散り散りに為ってしまうその日まで。

## 自己愛ラブソデー

私は貴方に真実を伝えない。だって伝えたら、貴方は壊れてしまう。こんな残酷な真実を知るのは、未だ私だけでいいの。それまでは貴方には、甘い甘アい優しい嘘を吐いてあげる。

貴方が今虐めいたぶり残虐非道なすべてを尽くしているその娘が、実は全くもって清廉潔白で何も悪いことをしていないなんて知ったら、貴方は傷付き慟哭し自らで自らを責めそして壊すでしょう。

私があんな娘に酷いことをされたなんて言っただから、貴方は私を守るために、全力でもってあんな娘を潰そうとしてくれている。

だから私は、貴方に嘘を吐き続けるの。

私は貴方を守るために、優しい優しいヤサシイ嘘を吐くわ。

最初は貴方もあんな娘も悲しみのどん底に突き落とす予定だったけれど、貴方の騎士<sup>ナイト</sup>ぶりを見て考えを変えてあげたわ。なんてなんてヤサシイ私！

最初は残酷な嘘を吐いたけれど、それ以降は優しい嘘なのよ。だって貴方が思った以上にあんな娘を突き落としてくれたのだから、ヤサシイ私はご褒美をあげなくちゃ。

だから本当に極上のご褒美は、一番最後にとっておこう。そのご褒美は、自分へのモノなの。

ヤサシイヤサシイ嘘を吐き続けた私へのご褒美。

私へのご褒美は、私の騎士となって動く貴方へのご褒美になるはず。だって私の手足なのだから、喜びだって同じでしょう？だから最後に、とっておきのご褒美を私と貴方にあげるの。

それは残酷な真実を貴方に伝えることができるというご褒美。悲しみの底なんかより地獄の底なんかよりもっとヒドイトコロに、突き落としてアゲル。



存在意義なんて

さあ始めよう  
夜闇に隠れた  
その宴

さあ終わろうか  
朝日に照らされた  
その宴

さあ始めよう  
陽の光に見つけられた  
その宴

さあ終わろうか  
漆黒の迫ってきた  
その宴

嗚呼 何と云うことが

始めようとしても  
始まらぬ

終わろうとしても  
終わられぬ

悉く失敗させられるのだ

こんなにも邪魔をするのは  
何の仕業か

どうしても我等は  
宴を始めねばならぬ

考える、考える

闇を創るは誰の仕業か

光を創るは誰の仕業か

宴の目的は

その者への侮辱の為へと  
変わり果て

元の目的などは消え薄れ

その者無くても  
存在できぬようになり

そして

我等は

所謂

## 【悪魔】

と呼ばれる  
ようになった

その者が、神が先に存在し  
絶対の権力を持ち  
光を創造した

唯だそれだけのために  
我等は悪と見做されるようになったのだ

\*\*\*後書き\*\*\*

天使と悪魔について考えていると、ふと気付くとこのような思考回路になっておりました。

悪魔は、天使が居なければ存在しなかったのかもしれませんが。  
天使に反してこそ、悪魔と云うモノに存在価値を見出だすことが出来るのでしょから。

私は、天使より悪魔の方が好きだったりします。悪魔の方が、天使よりも現実を見ているような気がしますし、私自身悪魔側の人間でしょから。

それではまた、歯車が悪意で漆黒に染め固められたときにでも。

僕だけのモノ！

噫、噫、どうしたことだろう！

如何して貴女の手は震えているの

如何して貴女の唇は噛み締め合っているの

如何して貴女の足はすくんでいるの

如何して貴女の膝小僧は笑っているの

如何して貴女の目尻には水滴があるの

如何して貴女の目は強く閉じられているの

如何して、貴女は、僕の手を取ってくれないの！

僕にあの小さなカワイイ手を見せて

僕にあの真紅のウツクシイ唇を見せて

僕にあのすらりとしたキレイな足を見せて

僕にあの丸いカワイイ膝小僧を見せて

僕にあの切れ長のウツクシイ目尻を見せて

僕にあの澄んだキレイな目を見せて

僕の、僕の、そう僕だけの手を取ってよ！

早くしないと、貴女のカワイクテ、ウツクシクテ、キレイな手が唇が足が膝小僧が真っ赤に染まっちゃうよ。

だって僕の、僕だけのものじゃ無いんだったら壊して征服して僕だけのものにしてくちゃいけないからさ。

早くしないと、貴女の目尻にあるよくわからない水滴が真っ赤になっちゃうよ。

だって、僕がよくわからないものが貴女に付着しているなんて許せないから、僕だけがよく知っている色にしてくちゃいけないからさ。

早くしないと、貴女の澄んでいたはずの目を潰しちゃうよ。だって、僕を、僕だけを見ない目なんていらさないからさ。  
僕を見る目に恐怖が浮かんでいるなんて絶対に絶対にゼツタイに認めることがないようにしなきゃ！

貴女はどうもがいたって、もう全部が僕のもの僕だけが思い通りにできるものなんだよ！

僕だけのモノ！

噫、噫、どうしたことだろう！

如何して貴女の手は震えているの

如何して貴女の唇は噛み締め合っているの

如何して貴女の足はすくんでいるの

如何して貴女の膝小僧は笑っているの

如何して貴女の目尻には水滴があるの

如何して貴女の目は強く閉じられているの

如何して、貴女は、僕の手を取ってくれないの！

僕にあの小さなカワイイ手を見せて

僕にあの真紅のウツクシイ唇を見せて

僕にあのすらりとしたキレイな足を見せて

僕にあの丸いカワイイ膝小僧を見せて

僕にあの切れ長のウツクシイ目尻を見せて

僕にあの澄んだキレイな目を見せて

僕の、僕の、そう僕だけの手を取ってよ！

早くしないと、貴女のカワイクテ、ウツクシクテ、キレイな手が唇が足が膝小僧が真っ赤に染まっちゃうよ。

だって僕の、僕だけのものじゃ無いんだったら壊して征服して僕だけのものにしてくちゃいけないからさ。

早くしないと、貴女の目尻にあるよくわからない水滴が真っ赤になっちゃうよ。

だって、僕がよくわからないものが貴女に付着しているなんて許せないから、僕だけがよく知っている色にしてくちゃいけないからさ。

早くしないと、貴女の澄んでいたはずの目を潰しちゃうよ。だって、僕を、僕だけを見ない目なんていらさないからさ。  
僕を見る目に恐怖が浮かんでいるなんて絶対に絶対にゼツタイに認めることがないようにしなきゃ！

貴女はどうもがいたって、もう全部が僕のもの僕だけが思い通りにできるものなんだよ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4655d/>

---

悪魔のドルチェ

2010年10月11日01時58分発行